

公望可同印全集

第二十二卷

谷崎潤一郎全集 第二十二卷

定價一五〇圓

昭和四十三年八月十二日印刷
昭和四十三年八月二十四日發行

著者 谷崎潤一郎

發行者 山越 豐

印刷者 白井倉之助

發行所 中央公論社

東京都中央區京橋二一一
電話（五六一）五九二一
振替東京三四



谷崎潤一郎全集 第二十二卷

目次

隨筆小品

「夜の宿」と「夢介と僧と」と

そぞろごと

人の親を観て

劇場の設備に對する希望

ノートブックから

父となりて

發賣禁止に就て

貢の十人斬り

私の初戀

詩と文字と

一

五

六

九

二三

二四

三三

三四

三六

三八

創作の氣分

夏日小品

梅雨の書齋から

淺草公園

朝鮮雜觀

早春雜感

支那劇を觀る記

伊香保のおもひで

支那の料理

反古箱

或る時の日記

其の歡びを感謝せざるを得ない

映畫雜感

日本の活動寫眞

「カリガリ博士」を見る

四二

四四

五〇

五七

六二

六五

七〇

七五

七九

八四

八七

九四

九八

一〇三

一〇七

映畫のテクニツク

一二三

支那趣味と云ふこと

一二二

女の顔

一二四

歌四首

一二六

頭髮、帽子、耳飾り

一二七

縮緬とメリンス

一二三

「永遠の偶像」の上演禁止

一二五

脚本檢閲に就いての注文

一二四

私のやつてゐるダンス

一二五

稽古場と舞臺の間

一二七

「愛すればこそ」の上演

一二〇

手記

一二三

上方の食ひもの

一二六

萩原君の印象

一二〇

洋食の話

一二二

映畫化された「本牧夜話」

一六七

瀧田君の思ひ出

一六八

都市情景

一六九

釋明

一七〇

栗原トーマス君のこと

一七一

「九月一日」前後のこと

一七二

關西文學の爲めに

一七三

芥川君と私

一七四

いたましき人（芥川龍之介追憶）

一七五

東西味くらべ

一七六

敏先生のおもひで

一七七

故人と私（小山内薫追悼）

一七八

東西美人型

一七九

關西の女を語る

一八〇

私の姓のこと

一八一

カフェー對お茶屋・女給對藝者

二七

料理の古典趣味

二六

春、夏、秋

二六

草人を迎へに行く日

二六

春寒

二七

秋、冬、春

二七

大衆文學の流行について

二九

鳥取行き

二九

天狗の骨

二九

倚松庵十首

三〇

追悼の辭に代へて（直木三十五追悼）

三〇

職業として見た文學について

三〇

映畫への感想——「春琴抄」映畫化に際して——

三一

蠣殻町と茅場町

三一

翻譯小説二つ三つ

三七

泉先生と私

三三

純粹に「日本的」な「鏡花世界」

三六

舊友左團次を悼む

三九

シンガポール陥落に際して

四六

白秋氏と私

五一

奉天時代の李太郎氏

五三

露伴翁追悼講演會に寄す

五七

追憶（菊池寛追憶）

五九

「細雪」回顧

六二

嶋中君と私

六七

「お國と五平」所感

七二

茂山千作翁のこと

八〇

新春試筆

八四

「曉の脱走」を見る

八六

久米君の死の前後

九三

「すむつかり」贅言	三九七
私の「幼少時代」について	四〇〇
歐陽予倩君の長詩	四〇三
あの頃のこと	四〇六
ふるさと	四〇九
秦豊吉君のこと	四二〇
「法成寺物語」回顧	四二三
幼少時代の食べ物の思ひ出	四二六
千萬子抄	四二九
伊豆山放談	四三二
日本料理の出し方について	四四〇
吉井勇翁枕花	四四二
古川緑波の夢	四四九
若き日の和辻哲郎	四五六
女優さんと私	四六三

わが小説——「夢の浮橋」

四六

武林君を悼む

四七

野崎詣り（池崎忠孝回想）

四七

京都を想ふ

四八

千萬子からの雪だより

四八

「撫山翁しのぶ草」の巻尾に（笹沼源之助追悼）

四八

「越前竹人形」を読む

五七

「夜の宿」と「夢介と僧」と

明治四十四年一月「新思潮」第五號

○ゴルキイの作品は、深刻な、憂鬱な色を帯びて居るばかりでなく、非常にウィットにも富んで居ると云ふ事は、嘗て My Fellow-Traveler を讀んだ時に氣がついたことであるが、今度の試演を見て殊更其の感を深くした。日本の俳優があゝの芝居を舞臺に上せると、暗い調子は案外現れずに、却て機智に富み、ユーモアに富んだ臺辭せりふの警句ばかりが、目立つて聞えた。四幕目時分には、僕は「この次にはどんな警句を云ふだらう」と云ふやうな氣持で見物して居た。一般の觀客も只管その警句を待ちかまへて喜び迎へる風があつた。二日目の如きは時々やかましい拍手の音、女子供の嬌笑さへ聞えた。若しもあゝの芝居を見て、「うす暗い、氣持の悪いものだ。」とか、「非常にグルーミーなものだ。」とか評する人があるとすれば、合點の行かぬことである。深刻と云ふやうな方面から云へば、「ボルクマン」の方が餘程すぐれて居た。

○併し、原作者たるゴルキイの意志は、やつぱりあの脚本を通じて、下層社會の慘澹たる状態、暗黒な呪ふべき人生を示さうとしたのであることも確だと思へる。唯其れを今の日本の俳優に望むことは、到底無理な注文たるを免れない。見て行くうちにも、西洋の役者にやらせたら相應に悽慘な調子を出すであらう

と思はれた箇處が随分あつたが、其れが少しも効果を齎さなかつた。其のうちで稍深き感銘を與へられたのは、二目目に於ける二幕目の幕ぎれであつた。大詰の幕切れなどは、非常に面白かる可き筈であるのに、サチンの「折角の夜會をだいなしにしやがつた。」と云ふ言葉が案外響かず、何處か間のあき過ぎた處が見えた。

○又五郎が上出來であつたと云ふ事は、衆評の一致する所である。あの役者はお白粉をこつて塗り塗つて、嫌味たらしい色男役に扮するよりも、却てあゝ云ふ役柄に成功する人であらうと思はれる。但し二目目の大詰で醉態を表す處は、あまり調子に乗り過ぎて、少しく平生の地金を出して居た。左團次のペベルがナタシヤを口説く邊にも、何となく鑄掛松を思ひ出させるやうな調子が見えた。路次の夕に於ける左升のルカ老人は、今少しく耄碌爺になつて居て欲しかつた。「そら、あの斧の一件でさ」などと云ふ言葉は、非常に耄碌した老人の口調で云はなければならぬ。櫓に腰を掛けて居る薙若の足の置き場だの、ペベルに對してはにかむ態度だのは、そつくり日本の女であつた。役々を通じて一番氣に入つたのはホテルの主人のスタイルであつた。一番不快を感じたのは、秀調の臺辭であつた。

○いろ／＼の缺點を差し引いて、今度の試演は非常に面白く見物することが出來た。殆ど此れと云ふ筋もなく、出て来る役者がバラ／＼に勝手なことをしたり、喋つたりして居る芝居——あの位大膽な、あの位新しい舞臺面を、舊套に泥^{ちり}んだ日本人の眼の前にひろげて、驚かしてくれたのが先づ何よりも嬉しい。役者が、然も舊派の役者が、色氣をぬきにして思ひ切つてグロテスクな姿に扮してくれたのも嬉しい。ゴルキイの暗い方面よりは、軽い方面の方が餘計表れたと云ふことも僕に取つては嬉しい。僕は「ボルクマ

ン」のやうな痛切に胸を撲たれる恐ろしい芝居は、寝ざめが悪くつてあまり見る氣になれぬ。深刻なる人生と云ふものは、實生活の方で神経衰弱になる程味はつて居る。此の上芝居で念を押して貰はなくつても澤山である。

○「夜の宿」の翻譯について一言したい。兎角の評はあるにも拘らず、僕は矢張好譯だと思つて居る。西洋のドラマを國語に譯すと大抵は臺辭がだら／＼と廻りくどくなつて、聞いて居てもシツカリ頭へ入つて來ないものであるが、今度は決してさう云ふ事はなかつた。殊にルカやサチンの臺辭は申分のない出來榮えである。露西亞の下層社會の語を譯すのに、日本のべらんめえ言葉を以てしたのは、甚適當なことである。それでなかつたら決して板へは乗るまいと思ふ。又下層社會の空氣が充分出まいと思ふ。但し此の際警むべきは、あまり耳馴れた言葉であるため、俳優が調子に乗つて默阿彌式にならないやうにすることである。今回も幾分か其の弊は認められた。

○いまだに耳に残つて居るのは、二幕目にサチンが酔つぱらつて入つて來て、「全體何にもねえんだ」と云ふと、そばから役者が大聲で「うそをつけ!!!」と怒鳴つた所。路次の夕のルカ老人の物語。「犬の皮から白熊の皮を拵へる。猫の皮からカンガルーの皮を拵へる。」と云ふ時の又五郎の調子、何れの幕に誰が云つたのだから覚えて居ないが、「もうぢき春が来るなあ。」と云つた臺辭などである。

○こゝまで書いて來て氣が着いたが、路次の夕の喜熨斗君の臺辭は、あまり上せ^{のぼ}あがつて早口に云つた所爲か、折角の深刻な文句がハツキリ聞えなかつた。

○「夢介と僧と」は、阿部次郎氏が朝日の紙上で云はれた如く、「一つ面白く遊んでやらう。」と云ふ氣持

の現れて居る以外に、吉井自身も大した抱負のある作ではなからう。うす暗い芝居を四幕も見せられた観客に、平明な、愉快な感じを與へる爲めに上場したものとすれば、純日本式の背景と相待つて、此の脚本は充分其の任務を完うして居る。併し、自由劇場としては、かゝる第二義的理由に煩はされずに、脚本そのものとして價值あり自信ある作——たとへば「河内屋與兵衛」のやうなものを演じて貰ひたかつた。

○新らしき思想を、角立^{かど}たぬやうに臺辭の中に織り込んで行く吉井の技量は、今度の脚本でも立派に認める事が出来る。

そぞろごと

明治四十四年十一月號「朱變（ザムボア）」

ゑぐりたる皮肉云はれてからからと笑ふ人こそあはれなりけれ
我が顔に似たる男のなくもがな心許してともに語らむ

會葬は悲しされどもちりめんの晴衣の襦袢肌によきかな
三十里離れつつ住めば吾妹子の鼻の形狀をふと忘れぬる

日に夜に我を指さし手をたたき嗤ふものあり何處ともなく
新しきキヤラコの足袋に桐の下駄先づころろと砂礫蹴りて見る

ひたひたと湯上りの肌たたきつつ鏡に向ひ生きんと思ひぬ

汗の香に夜こそ明けぬれ淺ましき有明雲をうす眼して見る

みづからを恃みかねつつしかすがに戀すとまでは云はずに置きしかな

ふと朝眼ざめし空は冴え返りさやかに秋の色ぞ見えける

悲しみに似たる涙ぞ流れける擦れ合ふ美女に眼を拂はれて

電車先づ到らんとして夜の空に電線鳴れば物思はする